

どこにでもドア

奨励	竹ヶ原 政輝〔たけがはら・まさてる〕
奨励者紹介	日本キリスト教団丹波新生教会牧師 同志社大学神学部嘱託講師

さて、アダムは妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「わたしは主によって男子を得た」と言った。彼女はまたその弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。時を経て、カインは土の実りを主のもとに献げ物として持って来た。アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。主はアベルとその献げ物に目を留められたが、カインとその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。主はカインに言われた。

「どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない。」

カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。

主はカインに言われた。

「お前の弟アベルは、どこにいるのか。」

カインは答えた。

「知りません。わたしは弟の番人でしょうか。」

主は言われた。

「何ということをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる。今、お前は呪われる者となった。お前が流した弟の血を、口を開けて飲み込んだ土よりもなお、呪われる。土を耕しても、土はもはやお前のために作物を産み出すことはない。お前は地上をさまよい、さすらう者となる。」

カインは主に言った。

「わたしの罪は重すぎて負いきれません。今日、あなたがわたしをこの土地から追放なさり、わたしが御顔から隠されて、地上をさまよい、さすらう者となってしまうと、わたしに出会う者はだれであれ、わたしを殺すでしょう。」

主はカインに言われた。

「いや、それゆえカインを殺す者は、だれであれ七倍の復讐を受けるであろう。」

主はカインに出会う者がだれも彼を撃つことのないように、カインにしるしを付けられた。カインは主の前を去り、エデンの東、ノド（さすらい）の地に住んだ。

（創世記 4章1―16節）

どこにでもドア

ドアがあるというんです。私たちの行くところ、いるところ。どんな時間、どんな場所にも、そのドアはある。それはピンク色の洋風のドア―か、どうかは分かりません。実際には目に見えないそのドアは、しかし、私たちのそばに、いつも、どこにでもある。

カインという人がいました。旧約聖書の登場人物です。彼の両親は、アダムとエバ。旧約聖書「創世記」によれば、神によって創造された最初の人間たちです。この二人から最初に生まれてきた子どもが、カイン。更に、その弟にあたるアベルが生まれます。先ほど読まれた聖書の箇所は、このカインとアベルの兄弟の物語です。これは大変衝撃的な物語です。兄が弟を殺してしまう。

私は、現在こちらの大学で「キリスト教とは何か」という講義を担当させていただいておりますが、春学期は旧約聖書を中心に扱います。最初の方から順番に、大体どんなことが聖書には書いてあるのかというのを見ていくんですが、旧約聖書の初めの方には、家族の物語がたくさんあります。それも、いわゆる「もめ事」が少なくありません。秋学期のチャペル・アワーの統一テーマが「見よ、わたしはあなたと共にいる」という創世記28章の言葉であるということですが、これはヤコブという人に語りかけられた神の言葉です。そしてこれも、実はヤコブが双子の兄であるエサウという人から命を狙われるようになってしまったところ、母の勧めで一旦家族を離れ、逃亡生活に入った、その矢先に訪れた神との出会いの場面にある言葉なんです。ここでの兄エサウの殺意の発端については、このお母さんが絡んだある事件があるわけなんです、これはどうぞ創世記の27章を読んでください。この出来事に関する記事なども私の授業では扱いますが、受講されている方の中には、家族の間でたら良からぬ感情が渦巻く旧約聖書の物語を不思議に思われる方も多いようです。「負の感情」とでも言うべきものが家族の間に生じるということに、素朴に違和感を覚えられるようです。確かに近年、日本で起こっている殺人事件の半数以上が身内の犯行によるものであるという統計があつてなお、私たちは殺人事件の犯人が実の家族であつたというニュースに、「どうして」という感情を抱くものです。

カインは、アベルを殺してしまいました。何が彼をその行動に駆り立てたのか。怒り、嫉妬、そういったものが創世記の記事からは読み取れます。そして、それをどこか見抜いているかのような神の言葉があります。

「どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない」。

ドアをくぐると

ドアがあるというんです。私たちの意志が、行為に変わる瞬間。それはドアを一つくぐるといふようなものなんだと、私はイメージします。内側にある意志が肉体をもった行為として現れるとき、私たちはドアをくぐっている。そのドアのそばで、罪という怪物が待ち伏せている。その怪物は、ドアの「外」にいて、出てきたら食ってやろうと私たちを狙っているんじゃないんです。それは、ドアの「内側」にいます。私たちの中に存在します。そして、そのすぐそばのドアへと誘います。

「さあ、俺と一緒に外へ出よう。そこにはとっても気持ちのいい世界が待ってるぞ」。

そんな声に導かれてくぐったドアのその先に、カインが見たものは、血を流しながら横たわる弟アベルだった。私はそんなことをイメージします。

この出来事は―カインとアベルの物語は、大変衝撃的な物語です。兄が弟を殺してしまう。しかし、この物語が更に衝撃的であるのは、アベルとは何者かということにあります。アベルとは、聖書における最初の死者です。神がアダムとエバを創造され、その子としてカインとアベルが生まれてきた。そして、アベルが死んだ。アベルは聖書における人類史上、最初の死者です。つまり聖書は、最初に死んだ人間は殺されたと言っているんです。人類で初めて死を迎えた人は、天寿を全うしたのではなく、殺人事件の被害者だった、と。私は、このことを思うたびに身の毛がよだします。聖書は、そんな人間の有り様を容赦なく明るみに出します。しかしなお、この聖書というものは、私の心を捉えて離しません。この救いようなのない存在を救われるべき者として愛される方をそこに見るからです。

ドアノブに手をかけて

ドアがあるというんです。ドアをノックしている人がいます。新約聖書のヨハネの黙示録3章の20節。

「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう」。

聖書の最初と最後に置かれている文書にそれぞれ、ドアの話があるのも面白いと思うのですが、この黙示録の言葉の中でドアをたたいているのはキリストでしょう。キリストは、中に入れてくれとおっしゃっているんです。そこで、キリストが私の中に住んでおられる様子をイメージします。キリストと親しく交わる日々がそこにあったとして、しかし、ふとした瞬間、ある感情が芽生え、それがいつしか意志へと成長し、やがて私を行動へと促します。そして、あの怪物が誘う声が聞こえます。戸口で待ち伏せているあいつです。その意志を行動に変えるべく、私はドアノブに手をかけます。

そのままドアを開け放った時、私はおそらく達成感にも似たものを味わうことでしょう。そして、ドアをくぐったその先に見るものは、血に染まった第一ではないかもしれませんが、深い傷を負った誰かかもしれません。いや、もしかしたら、もっと悲劇的な状況かもしれない。私たちにはいつでもその可能性がある。どこにでもそのドアはある。そんな風に感じないでしょうか。ドアノブに手がかかったまま、もうずいぶんと長い時間を過ごしてこられた方が、皆さんの中にもおられるかもしれない。

ドアをくぐれ

さて私のイメージはまだ結果を迎えていません。私の手はドアノブにかかったままです。どうしましょう。このままドアを開け放ってスッキリしてしまいませんか。

それを望まないところが、私の中にあります。ドアノブから一旦手を離し、足元にすり寄る怪物を蹴飛ばし、新たに善い意志を行為に変えるべくドアノブに手をかける。そんなことが私にできるとしたら、そんな力が私の中にあるとしたら、それを何と呼ぶべきでしょうか。

「良心」。

それがこの力の一つの名ではないでしょうか。この力が、キリストとの出会い、キリストとの親しい交わりの中で育てられていくと、同志社は信じてきたのだと思います。私もそう信じます。現在、さまざまな価値観が出会い、時に衝突が生じる時代にあって、この良心というものの意義は改めて大きなものと感じられます。この大学の教室の中にさえ小さなグロー

バル社会が存在する中、良心をもって人と出会い、良心をもって人と共に生きる。そのような人々が育っていくことを、切に祈るものです。「見よ、わたしはあなたと共にいる」とおっしゃる神の導きのもと、善い意志が行為に変わるドアを一つ、二つとくぐって行きましょう。

2015年11月4日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録